

2018年1月1日発行(毎月1回1日発行)第50巻第1号通巻639号



てんとう虫 1

UC Card magazine

2018 January

特集

「北海道」への道



地球好日 アブダビ&ドバイ

この人に聞きたい

大地康雄

日本遺産の旅

岐阜 高山市



近代産業化に向けて不可欠であった鉄道とビール。
二人の恩人が残した功績とドラマを通して
「北海道」命名後、150年の道のりをたどる。

文 山内昌之(歴史学者・東京大学名誉教授)

近現代史 北海道開発の「残響」

北海道近代史に
燐然と輝く業績
札幌駅を降りて、北一条通りをそのまま西一六丁目まで向かうと、およそ五万二千平米の広大な敷地に建つ木造二階建てと鉄筋コンクリートの洋館が見えてくる。北海道知事公館である。平成17年(2005)9月、かつて三井合名の迎賓館としても使われた知事公館の前庭で或る人物の胸像の除幕

式が行なわれた。この人物は村橋久成という。彼の名を知る人は北海道人の間でも少ない。村橋は、開拓使の顕官を勤めながら、明治14年(1881)に辞職した後、家族も捨て行方不明となつた。変わり果てた村橋は、神戸で明治25年(1892)に行路病者(行き倒れ)として保護されたが、三日後に死亡した。

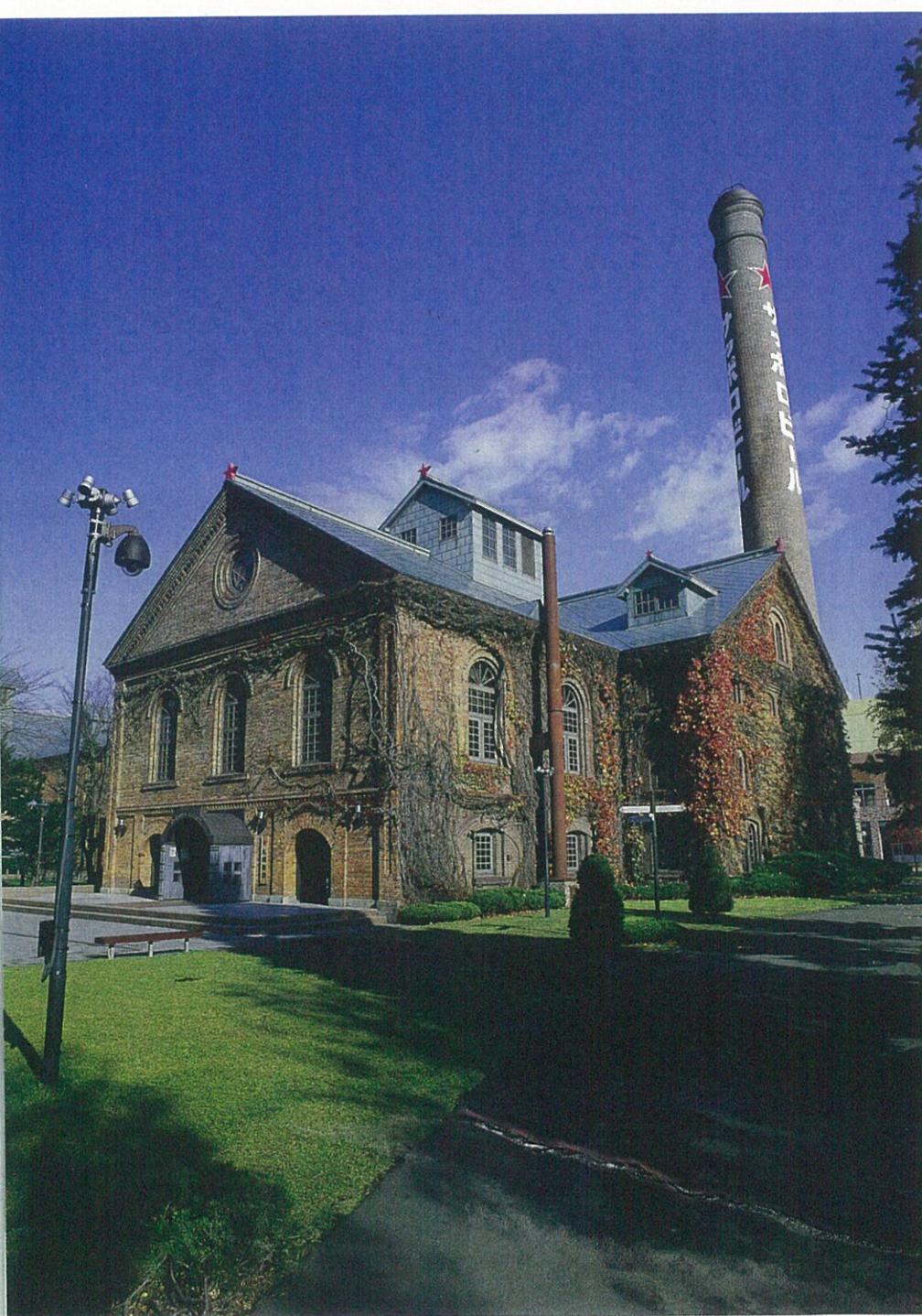
その顛末は謎に満ちているが、彼こそは、北海道民にとって偉大な恩人な

のである。鉄道敷設から炭鉱開発さらに各種工場の建設に至るまで、北海道の人間は他の土地に生まれ育った偉人たちから多くの恩恵を受けている。

村橋は薩摩人であり、天保13年(1842)の生まれである。「久」の名乗りが示唆するように、島津家の一門に連なる家系の出身であった。彼は、薩摩藩第一次英國留学生として密かにロンドン大学へ留学したこともあり、戊辰戦争では砲兵隊長として東北各地

を転戦した。この薩摩藩のエリートは、北海道開拓使に出仕し日本最初の低温発酵ビールを製造する開拓使麦酒醸造所を作つた。いまのサッポロビールの前身である。

そもそも開拓使の初期構想では、北海道のホップを原料としたビールを東京で試験的に醸造し、成功的暁には北海道に醸造所を作るというものだった。村橋は、これでは北海道の産業振興にならず、開拓の志にも反するとして、ビール製造にいちばん適した北海道で初めからビールを製造すべきだと主張したのだ。いまの道民からすれば正論であるが、万事に中央集権の傾向が強い明治新政府のことである。上役たちを納得させただけでなく、葡萄酒醸造所まで札幌の東に開設したのは先見の明というべきだろう。明治9年(1876)9月に完成した両製造所は、ちょうど今のサッポロファクトリーのある場所であった。



サッポロビール園の開拓使館。明治23年建造の製糖工場を「札幌麦酒」が明治38年に購入。当初は製麦所として活用された。©山口卓也

ビール製造にいちばん適した
北海道で初めからビールを
製造すべきだと主張した



残響
村橋久成胸像

札幌に「開拓使麦酒醸造所」を設立した村橋久成の銅像。彫刻家・中村晋也氏の作品。

た。その長官は、開拓使長官と呼ばず開拓長官というのが正しい。開拓長官の地位にあつたのは、薩摩人黒田清隆であり、村橋は開拓権少書記官として二歳年長の同郷の先輩に仕えたことになる。第二代内閣総理大臣となるくらいのリアリストだった薩摩閥の成功者黒田と、勵業課長や勵業試験場長といった現場になじんだ理想家肌の村橋とは、ケミストリー(折り合い)が悪かつたのだろう。

黒田は開拓使事業を民間で発展させるために、ビール工場などの官有物を破格の安値で同郷の五代友厚に払い下げようとした。五代は黒田より四歳年長の薩摩人であるだけでなく、村橋と一緒に英國に留学した仲もある。問題は、政府が千四百万円も投資した官有物をわずか三十八万七千円で民間に払下げようとした点にある。しかも無利息三十年賦という只同然の優遇措置を取つたので、スキャンダルにならないはずがない。同じ薩摩人でありながら村橋は、どうやら先輩一人の癪着に反抗したらしい。五代は関西財界を育てた大物であり、NHKの朝ドラ「あさが来た」ではデイーン・フジオカ氏の好演ですつかり名を知られるようになった。確かに東京財界の渋沢栄一と並ぶ企業人には違ひないにせよ、実像はテレビの石炭を海上経由で本州に運ぶルートが便利になつた。こうした断片的な鉄道線をつなぎあわせ、全体計画を立てた北海道鉄道の恩人こそ田邊朔郎にほかならない。

田邊は、かつて京都府知事の北垣国道に乞われて、琵琶湖疏水とインクラインを設計竣工させ京都市内への荷物の運搬手段を刷新した旧幕臣の工学技師であった。京都蹴上の発電所建設と市街電車の運行にも貢献した工部大学校卒の田邊は、明治29年(1896)に北海道庁長官だった岳父の北垣に頼まれて、東京帝国大学教授を辞し、臨時北海道鉄道敷設部長なる職に転じた。

田邊は、北海道官設鉄道の計画と建設にあつた功労者であり、その論文はアメリカの科学誌にも掲載されたほどの超高級技術者である。彼は帝大辞官の翌年、家族を連れて北海道へ転居したというのだから万事に本気だつたの

やまうち・まさゆき
1947年北海道生まれ。北海道大学文学部卒業。ハーバード大学客員研究員、東京大学大学院教授などを歴任。東京大学を定年退職後、明治学院大学研究知財戦略構成特任教授、三菱商事顧問、フジテレジョンズ特任顧問。87年「ブルタングリエフの夢でサントリー学芸賞90年瀬戸のリヴァニアサン」で毎日出版文化賞、02年司馬遼太郎賞受賞。06年紫綬褒章受章。専攻は中東、イスラーム地域研究と国際関係史。

府の悩みの種であつた。そこで鉄道敷設計画が最優先で進められる。新橋と横浜の間に鉄道が開業したのは明治5年(1872)であり、明治7年(1874)には大坂と神戸間の鉄道敷設がそれに続いた。その時からいくばくもなく明治15年(1882)に幌内と手宮(小樽)間が全通したのは驚くべきことである。これによつて内陸部から石炭を海上経由で本州に運ぶルートが便利になつた。こうした断片的な鉄道線をつなぎあわせ、全体計画を立てた田邊は、かつて京都府知事の北垣國

だ。明治31年(1898)には北海道鉄道部長に正式就任し、滝川から旭川までの上川線を開通させるなど、北海道全域の約1600キロの幹線鉄道敷設計画の調査に着手した。函館本線や根室本線といつた動脈の計画と一部建設に携わった田邊は、「東大教授のポストを捨て人跡未踏の北海道に夢の鉄道建設にかけた男」と言われることも多い。実際に、このタイトルで本(阪本一之著、北海道開発協会刊)も出されている。

やがて、函館と札幌の街に市電も走り、産業が隆盛して、新幹線も走りはじめた北海道は、今や世界中から多くの観光客が訪れる一大都市となつた。人生意氣に感じた村橋や田邊のような人間がいなければ、未開の原始林に被われた北海道の開発はありえなかつただろう。二人は北海道近現代史の象徴であり、多くの道民が彼らのようなくじく精神で北海道産業の礎を築いていったのである。

田邊は、かつて京都府知事の北垣国道に乞われて、琵琶湖疏水とインクラインを設計竣工させ京都市内への荷物の運搬手段を刷新した旧幕臣の工学技師である。京都蹴上の発電所建設と市街電車の運行にも貢献した工部大学校卒の田邊は、明治29年(1896)に北海道庁長官だった岳父の北垣に頼まれて、東京帝国大学教授を辞し、臨時北海道鉄道敷設部長なる職に転じた。

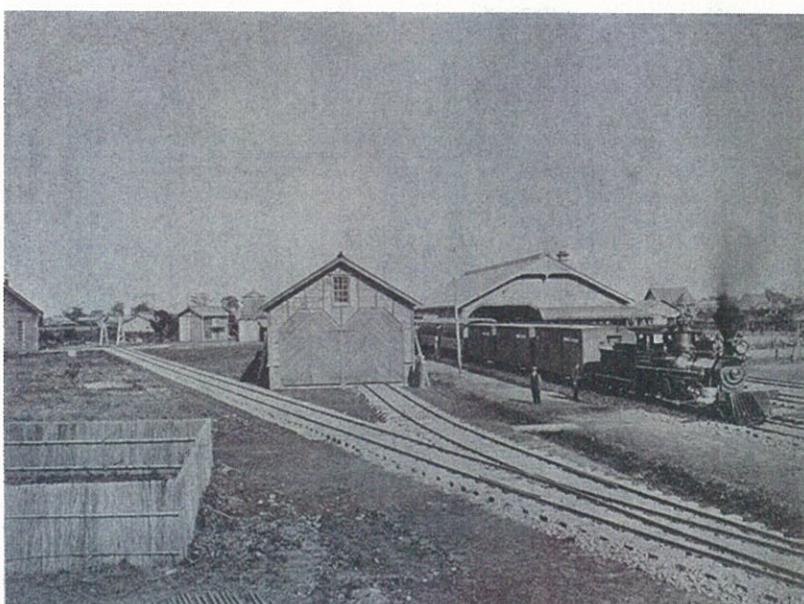
黒田は開拓使事業を民間で発展させるために、ビール工場などの官有物を破格の安値で同郷の五代友厚に払い下げようとした。五代は黒田より四歳年長の薩摩人であるだけでなく、村橋と一緒に英國に留学した仲もある。問題は、政府が千四百万円も投資した官有物をわずか三十八万七千円で民間に払下げようとした点にある。しかも無利息三十年賦という只同然の優遇措置を取つたので、スキャンダルにならないはずがない。同じ薩摩人でありながら村橋は、どうやら先輩一人の癪着に反対したらしい。五代は関西財界を育てた大物であり、NHKの朝ドラ「あさが来た」ではデイーン・フジオカ氏の好演ですつかり名を知られるようになった。確かに東京財界の渋沢栄一と並ぶ企業人には違ひないにせよ、実像はテレビの

ように単純なものではありえない。黒田の施策は、長期的に見れば民業育成という点で理屈も立つていた。しかし、政治の世界では薩摩閥の官民癡着と馴れ合いと言われても致し方ない。男の意地であり、理想家として憂鬱を発したのかもしれない。払下げは中止されたが、結局は麦酒醸造所も大倉喜八郎に払下げられ、やがて渋沢栄一も加わって札幌麦酒と社名が定められたのである。

いまわの際に村橋は身許を問われて「薩摩藩士族村橋久成」と名乗つたと伝えられる。今となつては心の奥を覗くことはできない。しかし、彼の業績は北海道近代史で燐然と輝いているのではないか。道知事公舎前庭の胸像には、「残響」という銘が刻まれている。まさに味わい深い名称であろう。

米科学誌に掲載された 超高度技術者

北海道は、ビールのような嗜好品の製造だけでなく、日本全体の産業化においては近代化のために必要な天然資源の掘削と運搬も要請されていた。なかなか豊かな鉱脈に恵まれていた石炭をいかに道外へ移出するかは、新政



明治15年の札幌停車場構内。
明治13年に開通した手宮—札幌間の幌内鉄道の終点として開設された。©北海道大学附属図書館



道内の鉄道敷設に尽力した田邊朔郎。
京都市上下水道局蔵



断片的な鉄道線をつなぎあわせ
全体計画を立てた恩人こそ
田邊朔郎にほかならない



北海道開拓の玄関口と評された小樽港の小樽運河。大正12年完成。©photolibrary



2016年3月に開業した北海道新幹線。

写真:山梨将典／アフロ

北海道には「いいふりこぎ」という言葉がある。格好をつけている人や見栄を張っている人くらいの意味である。語源は「良い振りこぎ」とでもいつたところだろうか。関西弁でいう「ええかつこしい」と似ているが、やはり微妙なニュアンスの違いもある。そして、この微妙なアヤこそ、道産子気質につながるようと思える。

一言でいえば、道産子には見栄つ張り、あるいは背伸びをするところがある。他人に対しても過剰ではないにせよ、自分を大きく見せようとする傾向は誰にもあるから、道産子だけが「いいふりこぎ」であるはずもない。「いいふりこく」というのは動詞である。「いいふりこいて」とか、「いいふりこんでない」といった具合に使うのは、多くの場合に、無理をして背伸びしていることへの揶揄である。「いいふりこいた」経験もある私から見ると、「いいふりこいて」とからかう人も、時には他人から同じことを言われたはずである。

「いいふりこぎ」には、知ったかぶりしてという皮肉めいた意味合いも込められている。かつてなら、道産子の会話のなかによく出てくる定番の話題があった。

「北海道には方言がないからね。標準語なんだから」

「最近は札幌も東京と同じだから、なーんも変わらないね」

この言葉を活字だけで眺めても北海道弁独特のアクセントとイントネーションは、理解していただけないだろう。仮に標準語をNHKニュースの共通語に近い表現と発音だと考えるだけで、北海道弁はとても標準語や共通語とは言い難い。まつたく似て非なることを道産子も知っているはずだ。それでも、東京や関西の人びとが「北海道の人は標準語を話すんですね」と言わざると、さほど相好をくすぐるわけではないにせよ、「そーうなんですよ」とか「厳密には違うんですよ」と言いつつも、標準語ではないと断定する道産子はさほど多くない。これが「いいふりこぎ」なのである。

東京は、世界でどの国にもない異相の大都会である。ワシントンとニューヨーク、北京と上海のように、政治と経済の中心地が分かれていなかった。文=山内昌之

イラストレーション=唐仁原教久

北海道には「いいふりこぎ」という言葉がある。標準語なんだから。最近は札幌も東京と同じだから、なーんも変わらないね。この言葉を活字だけで眺めても北海道弁独特のアクセントとイントネーションは、理解していただけないだろう。仮に標準語をNHKニュースの共通語に近い表現と発音だと考えるだけで、北海道弁はとても標準語や共通語とは言い難い。まつたく似て非なることを道産子も知っているはずだ。それでも、東京や関西の人びとが「北海道の人は標準語を話すんですね」と言わざると、さほど相好をくすぐるわけではないにせよ、「そーうなんですよ」とか「厳密には違うんですよ」と言いつつも、標準語ではないと断定する道産子はさほど多くない。これが「いいふりこぎ」なのである。

北海道には方言がないからね。標準語なんだから」

「最近は札幌も東京と同じだから、なーんも変わらないね」

この言葉を活字だけで眺めても北海道弁独特のアクセントとイントネーションは、理解していただけないだろう。仮に標準語をNHKニュースの共通語に近い表現と発音だと考えるだけで、北海道弁はとても標準語や共通語とは言い難い。まつたく似て非なることを道産子も知っているはずだ。それでも、東京や関西の人びとが「北海道の人は標準語を話すんですね」と言わざると、さほど相好をくすぐるわけではないにせよ、「そーうなんですよ」とか「厳密には違うんですよ」と言いつつも、標準語ではないと断定する道産子はさほど多くない。これが「いいふりこぎ」なのである。

東京は、世界でどの国にもない異相の大都会である。ワシントンとニューヨーク、北京と上海のように、政治と経済の中心地が分かれていなかった。



世界有数の都市とも違つて、あらゆる点で日本や世界のエキスを集めた街と、札幌をこともなげに比較して、「最近は札幌も東京と同じだから」と言い放っていたのは、少なくとも私の子どもの時分、1970年代では珍しい風景でもなかつた。かくてくわえて、「なーんも変わらないね」と来ると、「いいふりこぎ」だけでなく、知ったかぶりの域に大きく入つているのだ。

しかし誤解してはならない。道産子は、東京の魅力を無視して、勝手な放言をしているのではない。むしろ彼我の差を正確に熟知しているのだ。そのうえで、かなわぬ存在への謙虚な距離感を測定しつつ、何とか努力して自らを少しでも向上させようとする希望や志を心のどこかに持とうとする。これが道産子なのである。人間だから、時にはそうした心の内を外に吐露することもあるだろう。それを聞いた側は、「何いいふりこいて」とからかい、しゃべつた方は「少しいいふりこいたな」と照れる。この間合いとやりとりは、明治以降の植民地的フロンティアで男女が「いいふりこかず」に懸命に働いてきた道産子独特の空気なのだ。「いいふりこぎ」「いいふりこく」という言葉は、北海道各地で方言が急速に失われている最近、若い世代はもはや使わなくなつてはないか。津軽海峡という自然障壁が厳存していた時代、「いいふりこぎ」と知つたかぶりは良い意味で道産子に必要な資質であり、彼らを成長させるバネになつた。私もそうだったのかもしれない。今では、青函連絡船の代わりに羽田千歳間の飛行機を誰でも利用し、インターネットでたやすく東京ひいては世界と結びつくのである。誰も東京を過剰に意識して「いいふりこく」必要もなく、東京ではこうなんだと力みかかる理由もなくなつた。

この距離感の喪失はまぎれもなく、道産子気質の一部を変えてしまつた。色白で透き通るような肌を持つ男女らが明澄な表情を湛えながら会話するとき、そのやりとりに潜む独特な陰翳が失われたような気がする。それは言葉の変容や方言の喪失とも無縁でないように思えてならない。